第３回宇部市立小中学校適正規模・適正配置審議会　議事録

１　日　時　令和４年７月２９日（金）１８：３０～２０：１５
２　場　所　宇部市役所本庁　３階会議室（防災情報センター）
３　出席委員の氏名
　　鷹岡　亮　委員
　　松田　靖　委員
　　伊藤　一統　委員
　　才木　祥子　委員
　　小野　晃子　委員
　　上原　久幸　委員
　　井上　博己　委員
　　福永　久美子　委員
４　事務局出席職員
　　上村教育部長、床本次長、三好教育総務課長、原学校教育課長
　　伊藤教育総務課副課長、平山教育総務課副主幹

５　趣　旨
（事務局）
　ただ今から、第３回宇部市立小中学校適正規模・適正配置審議会を開催いたします。
　まず、資料の確認ですが、前回第２回の審議会の資料と今回新たにお送りした第３回審議会の資料をお持ちでしょうか。お持ちでない方はお申し出ください。
（事務局）
　本日は松尾委員と井上政志委員がご欠席ですが、委員１１名中９名の出席があり、宇部市立小中学校適正規模・適正配置審議会条例第６条第２項の規定に基づく、半数以上の出席がありますので会議が成立していることをご報告いたします。それでは、議事に入りたいと思います。ここからの進行は、鷹岡会長にお願いします。
（会長）
　それでは、議題の（1）将来あるべき学校の姿と実現に向けた適正規模等についてですが、資料は、第２回審議会の資料５の３ページをお開きください。これは、前回事務局から（案）の説明があり、皆さん方からご質問等もいただいたところで終了していました。今日は、まずは学校のあるべき姿について皆さん方からいろいろご意見をいただき、まとめていきたいと思います。その後、あるべき姿の実現に向けた取組について、議論を進めていきたいと思います。それではまず、学校のあるべき姿についてですが、前回小中一貫教育の効果や課題などについてのご質問がありました。また、義務教育学校については違和感がある、などのご意見が出ておりました。そこで、議論を進める前に、まず小中一貫教育について、学校現場におられる委員のお二人から、小中一貫教育の現状や効果、課題などについて実情をお聞かせいただけない

でしょうか。

（委員）

私は常盤中学校ですが、常盤中学校は恩田小と岬小、また琴芝小と常盤小の子どもたちも人数は少ないですが通っており、すべての子どもたちが進学する恩田小と岬小では、現在、学校教育目標や目指す子ども像を小中で共有しています。以前、小学校と中学校はこれまで、それぞれで頑張ってはいましたが、連携については、あまり進んでいませんでした。

しかし、小中一貫教育をやる中で、義務教育終了後にどのような子どもになっていて欲しいのか、それをイメージし教育を実施していこうという、動きがあると感じています。それがなければ、小学校が終わったら一旦切れて、中学校からまた始まるという形になると、せっかく小学校でやってきたものがつながっていかないことになります。また、小中一貫教育を推進する中で、一番私がいいなと思ったのは、先生たちが意識をし始めているということです。１０数年前、私が教諭だった頃は、あまり小学校を意識していなかったため、中学校に入ってこの３年間で子どもたちをどうにか育てていこう、と先生たちの中では考えていました。ですが今は、小学校ではどう教えているのか等、中学校の先生は小学校を意識し始めています。小中一貫教育を進めてきた中で、先生方の意識が変ってきつつあると感じています。ただ現状としては、まだ完全ではないので、実践しながら小中一貫教育をより良いものにしていく動きを作らないといけないと考えています。

今年度、小中学校の先生方で、「児童生徒につけたい力」をどうするかを検討する合同研修会を夏休みに企画しています。また、秋の合同研修会では、決定した「つけたい力」をもとに、カリキュラムについても考えていけたらと思っています。

（委員）

私は東岐波小学校ですので、中学校区は東岐波中学校区、１小１中の地域になります。そういった意味では非常に連携がとりやすい地域ではないかと思っています。先ほど言われたように、どんな子どもたちを地域で育てるかということ、その目指す子ども像に向かってどんな力をどのようにつけていくのか、というあたりはグランドデザインとして、学校の目標、育てたい子ども像、どんな教育活動を展開するかということを、全戸配布という形で全ての家庭にそれを配布しています。小中一貫カリキュラムも併せて配布して、取組内容を周知しているところです。一番の成果は、９年間が俯瞰的に見られるようになったということです。これまで、小学校は小学校、中学校は中学校という独自の文化があると言われていました。中学校はこうあるべきだ、とか、小学校の時にこうしておかないから中学校でこうなるのではないか、とか、なかなか理解しあえないという話がずっとありましたが、おかげさまで９年間というカリキュラムを一緒に作っていったことで縦のつながりというのはよく見えてきたと思います。子どものそれぞれの発達段階も、小学校、中学校の教員がともに見ながら子どもの姿を通して評価もしている、そのあたりは大きな成果であろうと思います。

本校では、中学校の教科書とか指導書を買ってほしいという要望が出て、今、中学校の全教科の教科書も職員図書に並んでいます。これは、私たちが指示したのではなく、

先生方が、算数ってこの後どうなっていくのか、ということを、指導書では知っています、学習指導要領もあります、でも実際教科書でどんなふうに教えられるのか、どんな授業があるのか、ということはあまり分からなかったものですから、先生方が中学校の教科書で研究しようという、そんな動きも出てきています。また、中学校の先生と一緒に合同研修会というのを行っていますから、小学校は小学校の悩み、中学校は中学校の悩みを出し合いながら、よりよい指導のあり方についても話し合いができるようになってきました。おかげさまで、生徒指導面での課題を共有して各家庭でこんなふうに取り組んでほしい、大きなもので言えば今スマホの扱いがありますが、そういったメディアをどうしていくかということを、小学校も中学校も家庭も地域も一緒になって取り組んでいるところです。

良いことばかりに聞こえますけれども、課題もたくさんあります。連携しているとか、一緒に研修しているというと非常に聞こえは良いのですが、わずか年に３回とか、それぐらいの回数しか取れません。もっと取れば良いのでしょうが、全員が集まれるのは３回しかありません。ではどうしたら良いのかというと、それぞれの教科ごとに少しずつ集まったり、最近はリモートでお互い顔を合わせて話をすることも増えてきました。そうは言っても忙しい先生方ですから、大きな課題と言えば、連携がどこまでできているか、ということです。それをこれから私たちも知恵を出して色々な機会を作っていかなければと思っています。

（会長）

ありがとうございました。小中一貫の良いところや課題であるとか、今のお話しの中では決して完成形ではなく先生方も悩みながら進めている、というお話しだったかと思います。ただ、そうすることによって組織としての意識、特に９年間という意味での組織としての意識が少しずつ出てきており、それが良い方に少なくとも展開しているというところをお話しいただいたと思いますが、委員の皆様から、今のお二人のお話しにつきましてご質問やご意見等ありますか。ぜひこの機会にご質問いただこうと思いますがいかがでしょうか。

（委員）

小中一貫のメリットのお話し、どうもありがとうございます。小野、二俣瀬、厚東と厚東川中学校では小中一貫校の取組ということで、学校運営協議会はじめ年数回の協議を行い、実際にどんどん動きだし、進んでいると思います。各小学校が遠いので３校合同学習等を通じて子どもたちが触れ合いながら中学校で一緒になるということで、今、地域の力を借りて進んでいけるような形になってきているのがすごく良いと思っています。やはり学校の先生のご負担も大きいですし、進めたい像も結局は家庭に落とし込まないとあるべき姿に向かっていかないということもあるので、学校が示した像に対して地域で何ができるのか、家庭では何ができるのか、といったところを今一緒になって進めていっているので、そういう形が他の校区でもとれるようになると良いのかと、話を聞きながら思いました。

（会長）

他にご意見やご質問、補足等ありますか。

（委員）
　補足になるかどうかわかりませんが、今話題になっている小中一貫教育というのは手段です。小中一貫教育というやり方を使って何を目指すのか、というところで、先ほど両校長先生からお話しが出ました、子どもたちにつけたい力をつけるには、小学校、中学校ばらばらでやっていたらつかないから、９年間続けて、つなげて、発展させていけばよりつけたい力がついてくるのではないか、そして今、先ほど言われたように、それは学校の力だけでできるものではないので、家庭の力、地域の力と一緒になって育てていきましょうということですので、やはりこの小中一貫教育というのは大切な取組だと私も思います。これは、山口県内見ても宇部市と同じように他の市町においても全市全町をあげて小中一貫教育を進めていこうというところがどんどん増えてきています。そういう流れ、これからの子どもたちを育てるためにはとても有効なやり方なのだと、私は考えております。
（会長）
　小中一貫は手段だというお話しでした。学校の力だけでなく地域の力、家庭の力を上手に活用しながらこの仕組みを、今の、現代の教育の中で上手く機能しそうなところがあるというお話しだったかと思います。ここまできまして小中一貫教育の現状や効果、課題というところですが、大体ご理解いただけたでしょうか。いかがですか。
（委員）
　常盤中学校は、見ると、岬小学校とか常盤小学校、あるいは琴芝小学校から来られていますが、そういった時に、小中一貫ということになると結構やりにくいのではないかと感じるのですが、その辺りをどういうふうにされているのか、教えていただければと思います。
（委員）
　本校は４つの小学校から上がってきます。それで、人数が多いのは恩田小学校、岬小学校で、後は常盤小と琴芝小からも少しですが入っています。現在の小中一貫は、岬小、恩田小、常盤中学校というくくりでやっています。それでは常盤小や琴芝小から入ってくる子どもたちに対してはどうするかということで、今、常盤中学校が取り組んでいることは、常に分かるようにと情報提供はできますが、それ以外は少し苦しいところです。入ってきて、大きく違うのはいけないと思っていますので、宇部市全体で取り組んでいることは共通だと思いますからそこは共通にやっていこうという形で、子どもたちがなるべくそういう情報を知らないということがないようにというので、学校だよりは必ず毎月その子どもたちには配っています。今は情報提供で終わっているのは確かなところです。
（委員）
　もう一つ気になるところが、常盤小学校は西岐波中学校にも行けるし、琴芝小学校は上宇部中学校にも行けるわけですが、その場合、この２つの小学校はどこと小中一貫教育をしていくのでしょうか。同じようなグランドデザインといいますか、どこと話しをすれば良いのか、ということがあるのではないかと思います。その辺り、結構苦労されているところなのでしょうか。

（委員）
琴芝小学校は、主には上宇部中学校に入ってやっていると聞いています。常盤小学校の方は、西岐波中、主には西岐波中学校と一緒にという形で進めている、多く進学する中学校と取り組んでいるという形になっていると思います。本来中学校同士もつながっていればまた違ってくるのだろうと思いますので、小中連携だけではなくて、中中連携、小小連携も、本来はそういうものも必要はないかとは思いますが、なかなかそこまでになるとちょっと難しいところがあります。
（会長）
他にいかがでしょうか。
（委員）
今のお話しですが、学区によって、校区によって、というところ、これは他の自治体さんでも話になりますが、宇部市と同じように、一つの小学校が分かれて複数の中学校に行くところがあります。そこがやっておられる、やろうとしておられることは宇部市と、やり方は一緒ですが、考え方として、９年間で子どもたちを育てるということはどこの中学校区で考えても一緒です。ちょうど、松岡校長の話の中でもありましたように、学校だけ見ると小学校の教職員は中学校を見据えて関わっていく、中学校は小学校の学びをつないでいくというところで、どこの中学校区であっても９年間で育てようというところは同じことをやっています。それでは、そこで、例えば小学校で６年間育った子どもたちが中学校に行った時にマイナスになるかというとそうではなく、積み上げてきたものを、また別の中学校区に行くことになるかもしれないですが、更にそれを積み重ねていけるということで、先ほど言いましたように小中一貫教育は手段ですので、その手段を使うことによって子どもたちの一本につながっている学びや育ちというものは例え中学校区が変わってもそれに積み重ねていけるのではないかと思います。情報提供とか、難しいところもありますが、やれることから進めていっては、というところもあります。
（会長）
ありがとうございます。
（委員）
そうなると、例えば小中一貫の中学校、小学校があって、この小学校の生徒が別の中学校に行くということになると、要はグランドデザインというのは、見ると、その学校の特徴に合ったことや問題点を取り上げて、細かに計画されており、それに沿って皆でやっていきましょうというようになっていると思うのですが、それが途中でぷつっと切れるような状態になるのではないかとそれが心配です。やはり今後そういったことをやっていこうとするならば、中中連携といいますか、そういう小中一貫をやっているところに関しては、基本的な部分をきちんと整理しておかないと、戸惑うところが出てくるのではないかと、そんな感じがちょっとするのですが、いかがでしょうか。
（委員）
おっしゃる通りだと思います。ですので、小小連携が大事になるでしょうし、中中連携が大事になろうかと思います。そして、宇部市の小学校、中学校は、目指しておられ

るのは、宇部市として育てたい子どもの姿というのがおありだと思います。全ての小中学校がそこを目指しておられますので、そういう部分では共通して取り組めるところも出てくるのではないかと、そこを見据えながら小小連携、中中連携も同時に進めていくのが大事になると思います。

（会長）

宇部市としての育てたい子ども像というキーワードが出てきました。また、今後、という言葉もありましたが、今後、今の学区のままでいくとすると、宇部市として育てたい子ども像、更に各学区の特徴みたいなところをするためには、小中連携、小小連携、が必要になってくる、そうすると、忙しい先生方はまた色々な会議が必要になってきたりするが、それをそんなふうに進めた方が良いのか、あるいは学区みたいなものをちょっと見直して１小１中とか２小１中という形にした方が、先生方がそこの部分でやりやすい、地域としてもやりやすいのか、その辺りを今議論の中で委員の皆様に良い視点をいただいたかと思っていますが、これはどうでしょうか、小中一貫のところは、まだ議論等必要なところがあれば言っていただければと思います。いかがでしょうか。

（委員）

ここの文章の中に小中一貫教育を完全実施とあるのですが、この完全実施という言葉が気にはなっているのですが、完全というのがどういう状態で、そこに本当に向かっていけるのか、というところは、今までの会議の中では学校区が違う問題があったり、先生の負担が大きくなったり、等のご意見を聞く中で、ここに、完全実施を目指すべきなのかというところも気になっています。この点に関して他の方の意見もお聞きできたらと思います。

（会長）

後で事務局の方からこの完全実施という言葉に込めた思いのようなものをお聞きするとして、委員の皆様から、今の小中一貫教育について議論してきまして、小中一貫教育を完全実施し、という部分について委員の皆様がどういうふうにお考えか、ありますか。いかがでしょうか。

（委員）

元々、小学校の数と中学校の数は当然違います。そうすると、１小１中ということは、たまたまそこがそういうふうなエリアになっているだけであってほとんどのところは大体小学校が多くて中学校が一つというのが普通だろうと思います。元々小中一貫を生み出したのは、子どもの成長を考えた時に、例えば４年生から５年生になる、それから６年生から７年生になる、その時に大きく知能と体が変わるということで、これは小中一貫校にもっていった方が良いということで、はじめは広島大学が呉市の場合を取り上げて小中一貫校を始めたという話を聞いていますけれども、それは元々標準だろうと思いますので、もう１小１中ということは数が少ないのだということを前提に物事を考えていかないと、完全に、ということはちょっと不可能に近いところがあると思いますので、これはこれでやっていかないといけないし、また小学校が２つあって中学校が１つというのも、これは逆に私はメリットもあると思います。どちらも良いところもありますし悪いところもありますし、その辺はうまいこと取り上げればマイナスに

なることはないと考えています。

（会長）

他はいかがでしょうか。今のお話しの中でも、小学校が１つに中学校が１つ、小学校２つに中学校が１つというところのお話しも出ましたが、子どもの成長というキーワードが出ていて、中１プロブレムとか、様々なことがあって、子どもたちの成長のためにどうしていったら良いのかといった時の手段の一つとして小中一貫教育がうまく機能するのではないかというお話しだったかと思いますが、いかがでしょうか。事務局側だと、この完全実施という言葉にはどういう思いを込めておられるのでしょうか。

（事務局）

事務局における完全実施というのは、先ほどのお話しにも関連しますが、宇部市のあるべき姿、宇部市の目指す子どもの姿としては当然統一したものがある、その中にまた地域ごとの目指す姿、これがあります。それをできるだけ地域の特性を生かしていくという中で、できれば、理想的には１つの小学校、これは２つの小学校でも良いのですが、小学校が進学する中学校は１対１の関係になる方がより良いということです。２つの小学校から１つの中学校に行く、１つの小学校が１つの中学校に行くという形もありますが、できれば、１つの小学校が２つの中学校に分かれるよりは、１対１の関係にあることが望ましいということで、完全実施という言葉を使っています。

（委員）

ということは、今の状態では完全実施は難しいということでしょうか。１小１中、２小１中で、１つの小学校から２つの中学校に行く状態ではない方が良いというご意見かと思いました。望ましいのは１小１中、２小１中で、１つの小学校から２中に分かれるのは、これは完全な状態にならないというご意見だったのでしょうか。そこの理解ができませんでした。

（事務局）

先ほどのお話しで、どなたかがその学校に行った時に別の学校から来る子どもに対しては細かく統一できていない部分があったという話があったと思いますが、１つの小学校から２つの中学校に分かれるとどちらの方を重視していくか、ということになってしまうので、そういう意味では完全実施ができていない、という意味です。ですから、宇部市全体の子どもの育て方としては統一的なものがありますが、中学校区ごとという形になると少しそこが不完全なのか、という、そういう意味合いです。

（会長）

私の理解だと、宇部市として育てたい子ども像があって、それは宇部市として育てたい子ども像、小学校も中学校もそれに向けて頑張っていくけれども、先ほどのご意見でもあったように、地域や地区であるとか、そういうところの子どもたちの状況であったり特徴であったり、あるいは地域の持っている特徴もあるかもしれませんが、そういうものの中で、子どもたちを育てていく時にそれぞれのどういう力をつけさせたいかが少しずつ変わってくる時に、１つの小学校が１つの中学校、あるいは２つの小学校から１つの中学校、１つの小学校が２つの中学校に行ったりするという状況では、なかなかその全てに対応できない部分があるから、そこの部分はある小学校はある中学校に行

っていただいた方がしっかり連携がとれるだろう、その、しっかり連携がとれるという意味を完全実施というふうに言っているということでしょうか。そういうことを目指したいと、目指したいのはそういう方向であって、もちろん色々これから問題が出てくるから、小中一貫を実施しようと思っているが完全にはまだなっていない、それを完全実施の方向で、皆さんで目指しませんか、ということがここに書かれているのではないかと思います。

（会長）

もう少し考えていただきながら、また後で質問は出てきたらこの部分に戻りたいと思います。

（会長）

それでは、一応、小中一貫のイメージが皆さんの中で少しできてきたかと思いますので、これはあくまでも先ほど言われたように手段だ、というお話しをいただいておりますので、もう少し戻ってそもそも学校のあるべき姿というところを各委員の皆様がどんなふうに思われているのかというのを忌憚なくまずは出していただいてそれを少しずつ皆さんで質問をしながら意見のすり合わせをしながら少しずつまとめていければと思います。

（会長）

それでは、どなたからでも構いませんので学校のあるべき姿というものに関しまして皆様が思われている姿についてご意見いただきたいのですが、いかがでしょうか。

（委員）

地元の小中一貫教育の厚東川中の例でもお伝えしましたが、やはり学校と地域は切り離せないというのは、私の意見ではずっと思っていて、学校のあるべき姿で、そこに住む子どもたちがどういうふうに育っていくかというのは、もちろん学校の環境や先生の力も大きいですが、何より地域の力が大きいと私自身は感じています。例えば小野小で言うと、小野の恵まれた豊かな環境の中でふれあい学習というものをたくさんさせていただいて、地域の方とのふれあいを通じる学習をしながらふるさとが大好きという、小野が大好きで小野でもっと勉強したいという、自分の言葉で自分の学校自慢ができる子どもたち、自分の意見として言えるというのはやはり宇部市の次の１００年を作るのは今生きている子どもたちだと思うので、その子どもたちが自分の故郷に自信を持ってこれは良いと言える環境、それを学びとして与えてくれる地域の力も大きいですし、そういうところはやはり学校というのは、もちろん教育というベースが基ではありますが、学校のあるべき姿として持っていたいというのは私の意見ではあります。

（会長）

今のような、委員の皆様が思うような学校のあるべき姿というところを忌憚なくお話しいただければと思いますが、いかがでしょうか。

（委員）

これはもう簡単に言えば、社会に出るための準備です。だから、大局的に物事を考えていかないと、自分の周りだけ、あるいはエリアだけを考えて判断すると、良くないと

思います。

（会長）

社会に出るための準備、というところが、大本になるところだと、あるいは大きなところだというご意見、ありがとうございます。

（委員）

学校はやはり、子どもたちの自立心を育てていく場所であってほしい、というのは、親として思っています。先ほど、他の委員さんも言われました、社会に出ていくための準備と、子どもには子どもの社会、世界があって、子どもの中でしか育めない、人間関係の良いところも悪いところもあると思いますが、小中一貫の教育を学校で９年間進めていく中でスムーズに途切れることなく子どもの育ちを学校と家庭とでサポートしていけたら良いとは思っています。それで、残念ながら、といいますか、地域の方と学校がどのように連携していくかというところのイメージが私はつかないものですから、もちろんコミュニティ、地域の皆さんのお世話になることもあるのですが、どういうふうに関わっていっていただくかというのは私の中でまだ答えが出ていないところです。

（会長）

途切れのない子どもたちの育ち、学校と地域の関わりのイメージについては他の委員さんがこれからどんどん出してくれると思いますのでそれを聞きながら意見をまとめていっていただければと思います。

（委員）

私の考える学校のあるべき姿はやはり地域というものを切り離して考えられません。学校はやはりそうだろうと思っています。となると、宇部市の中でも市街地と北部の小学校と考えると若干変わってくる感じもしています。ただ、子どもに対して教育ということを考えてみると、同じような状況を体験させて、そして自ら子どもたちがその中で自分が判断して自分の行くべき道を作り出していくという、だから、どちらも今の状況を考えてみるとちょっと寂しいという感じがしています。市街地の小学校、中学校の生徒は、田舎の、要は地域が膝を突き合わせて子どもたちと一緒に何か育っていく環境というものが分かっているかなということと、北部の小学校、中学校はクラス替えがない、ということがあって、人が変わることに対して自分をどう磨いていくのかという、そういった力というものがなくなってくるという、そこをやはりお互い補っていく教育の仕方ということができる学校ということが一番良いと思っています。だから、やはり地域といったものを大事にしなくてはいけないし、また、学校の中の子どもたちの交流も大事にしていかなくてはいけないということで、本当にどうすれば良いのかという感じもしていますが、そういったことが可能になる、可能にしてしまう学校っていうものができれば良いという気が、私はしています。

（会長）

最後の、「可能にしてしまう学校」というのは良いと思います。

（委員）

あるべき姿って、難しいです。「あるべき」というのが難しいと思います。ありたい姿、こういう学校でありたいという皆さんの夢であるとか、希望であるとか、そういう

ふうなものだと思います。それは、もちろん、それが正解というのはないわけですからこういうふうな学校にしたいというのを、意見を出し合いながらそれを目指していくということがこれから大事になっていくのかと思います。そういう意味で、事務局から今示していただいている４行の言葉ですが、これも大事な視点だと思います。ここにある集団規模というのもやはり子どもたちの成長にとって欠かせないものだと思います。ではそれがどの程度の規模が良いのか、これもまた人によって考えはいろいろあろうかと思いますが、大事なのは子どもたちにとってどうなるのが良いのかというところを私たち大人が考えていくということで完全なのか完全でないかは分かりませんが、集団規模のもとで小中一貫教育を実施し、そして義務教育９年間を通して子どもたちを育てる、それは全ての大人の役割でもありますので、先ほどもありましたように、地域もしっかり関わっていただいて全ての大人で子どもたちを育てていける、そういう雰囲気というか、仕組みがある学校が私はありたい姿だと思っています。

（会長）

最後の、全員参加の学校の仕組みという言葉が出てきました。

（委員）

この会に出る前に、福祉の皆さんと学校教育のものがみんなで集まってお話をする会がありました。その中で子どもの権利という話がテーマで挙げられていて、子どもたちの権利を皆で考えましょうという会でした。それを思った時に、子どもは学校をもちろん選べませんし、そこで生まれたらその地域の学校に行くわけです。それはそれで地域と一緒になって学校づくりをしていく、先ほど皆さんがおっしゃっているありたい姿の学校に近づけようとみんなでがんばっているのですが、現実的には非常に社会性を育むには厳しい場面もあるかもしれません。そういった時に、子どもたちはやはりこんな学校でありたい、こんなふうに学校生活を送りたい、という思いもあるでしょうし、今日、子どもの権利の話をした時に、この、今あるべき姿とか重ね合わせて、大人の論理も大事だけれど、子どもたちの気持ちも聞いてみたいという思いを抱きながら見ていました。

私は仕事柄事務局に勤務することも多く、ある市に勤務した時に、学校が当然統廃合の対象になったり、子どもがあまりにも少ないので廃校になるのではないかとか、休校になるのではないかという話をするような市教委にいたこともありました。たった一人の小学生で中学生が数人いたのですが、ではその子は本当に幸せだったのかとか、つけたい力がつけてやれているのだろうかと思った時に、複雑な思いで見ていたことがあります。地域は学校を存続したいからずっと一人になるまでやってくださいって皆さん言われました。

そういう現実を見てどちらの思いも分かるのですが、先ほど社会に出るための準備だと、将来は社会に参画する人を育てる、となった時に、やはり子どもたちにどんな力をつけさせたいかなと考えたら、ある程度の規模があって、そしてまた子どもも選択できるようなそんな姿が望ましいのかなと思いました。私もできるだけ明るく考えようと思って悲観的に物事を考えるのではなくて何ができるかなと思って知恵を絞っているところです。あまり意見にならなかったかもしれませんが、子どもの権利という視点

でも考えていきたいと思いました。

（会長）

先ほどのお話しでもありましたが、自分事だけで考えるのではなくてもう少し広いところから子どもたちの観点とかそういうところでもこのありたいなという姿、あるいはこういう学校にしたいよね、というところが委員の方々からどんどん出てきていただければと思いました。

（委員）

私は北部なので、北部の関係を頭の中に入れながら学校とは何かと考えてみた時に、やはり北部は農業地域ですので、農業という産業を考えてみた時にはそこに人が来てもらってそこで子育てしてもらって農業を守っていくというか、そういったことを今後やっていかなくてはいけないとう状況に、今日本はなってきています。その中で子どもを育てていく、そういった環境ということを考えてみた時に、学校というのは絶対必要なのです。小学校もないようなところには誰も行かない、ということを言われておられる方も実際に耳にします。そういったことを考えると、地域の中の学校ということに関しては子どもの教育ということもありますが、地域の中の産業とか日本の中の産業を守っていく上で、必要というところも考えていくべきかという感じはしています。でないと大変なことになっていくと思います。だから学校教育だけというのではなく、もっと広い目で、コミュニティなどは切り離して考えると最初に言われましたが、そこを切り離してというのは少し難しいという感じはしています。

最終的に小学校をどうするか、中学校をどうするかといった時にどうなのかというのはすごくあって、私の頭の中では葛藤しています。皆さんの言われていることもよく分かるし、子どもの教育を大事にしていきたいということもよく分かるし、それと地域とのはざまというか、その辺をどうするのかと、どれが一番良いのかというのがすごくあります。まだ私の頭の中では悩んでいます。

（委員）

私も北部なので、同じように自分の中でも葛藤はすごくあります。ただ、毎日子どもたちが、これが楽しかった、あれが楽しかった、みんなと何した、という話を聞いて更に地域の人にあいさつをしたりとか、そういう人としての温かさを子どもが教えてくれるような環境で学べているというのはそれはすごくありがたいことだし、地域なくしてはないだろうと思うとやはり地域の中の学校という役割、それがあるかないかではだいぶ違うと思うので、そういった意味で地域の中で学校ってとても大事だし、地域の人が協力する上で学校ができることもあるし、ふれあい学習等で言うと先生の負担を減らす上でも地域の先生をどんどん入れて、先生の負担を減らしつつ、より地域の特色を生かした深い学びができるという利点もあるので、そういった意味では、関りは深いし切り離せないということはあります。ただ、この集団規模、ある程度の規模というのがいつも心の中に引っかかって、それってどのくらいなのだろう、誰が判断するのだろう、というところはずっと思っています。私個人の考えですが、たった一人、うちの子一人になっても行かせたいかというと、そこはとても正直なところ親として難しいと思うところもあります。ですから、そういった意味で子どもの意見もとても大事だと

思うので子どもの意見を聞きつつ、今の環境を聞きつつ、どうしたら良いかというのは親としても地域としても一緒になって考えて、それを言葉として発して形として実現していけるというものがこれからの学校のあるべき姿、ありたい姿として向かっていけたら良いと個人的に思っています。

（会長）

他にいかがでしょうか。

（委員）

私は、宇部はまだまだ甘い面がたくさんあると思うのですが、皆さん方本当はこの現状が残れば一番良いと考えておられると思います。ですが、その現状ができないからこの適正配置・適正規模を見直そうと皆さん方考えておられるのだろうと思いますが、山口県の北部などは本当に恐ろしいほど学校の統廃合が進んでおります。この前、於福にお伺いして校長先生ともお話ししましたが、学校も時間の問題で、良いも悪いも子どもがいないのだから、もう学校は一緒にならざるを得ないと。スクールバスであちこち学区を走りながら一つの学校にまとめざるを得ないと、本当に深刻な話です。

元々は子どもがいないのだからこういうものを皆さん方で話し合わなければいけない、ということなのだから、子どもの数はどうしようもない、これがまず基本なのです。もちろん子どものために皆さん方は話し合っておられる。子どものために話すけれども、やはり大人はその指針を示さなければいけないだろうと思います。だからある程度の犠牲はどこか必ず出てくると思います。ただ、それを皆さん方が納得できるような方法で、絞っていかないといつまでも、こうありたい、こうしましょうということでは、話はいつまでも平行線だろうと思います。

そういうことで、県の北部の方の、一度このような場所に来ていただいて、北部の方がどう苦しんで一つの学校になっていっているか、話していただくと、本当に惨い話でございます。

（副会長）

私は、納得できないことが色々あって、そもそも、先ほど小中一貫の話をされてここまで話してきましたが、小中一貫とこの話との連続性って、私は小中一貫の協議会のメンバーもやって、松岡先生と一緒にやっていますが、ちょっとその辺が良く分からない部分と、それと今文科省の政策、県の施策でも、社会教育法が改正されて地域連携の教育の方に注力されて、学習指導要領のメインが「地域に開かれた教育課程」ということになっています。その辺を見ずしての議論ということはないかと思います。それというのが、学校というのは社会の一つの装置に過ぎないので、社会の中で学校というのはどういう位置づけになっているのか、当然子どもたちが通う場ではあるのですが、子どもたちは、先ほど来話が出ていますが、社会のメンバーになっていくための通過点として学校が存在しているので、その学校を社会としてどう考えていくのか、どういうものとして考えていくのか、ということと、もう一つ、子どもたちのためだけのものではないということが、今、文科省の施策なのです。だから、学校を核として地域づくりをしなさいというのが文科省の施策でもあるので、その辺をちゃんと考えていかないといけないのではないかと思います。それと、先ほど来から理想的な皆さんの思うところとい

うお話が出ていますが、要は今、もう一つ、文科省が良いというわけではないのですが、もう一つはアウトカムというものをちゃんと考えていく、成果を考えていく、学校はどういうものを育てていくのか、それを明確に、育てていこうとか、抽象的な言葉で包むのではなくて、何を実際に育てていくのか、それに関して今どんな問題があるからどうしないといけないのか、だから小中一貫をしないといけないという理由は何なのか、２０年くらい前に中高一貫をすごくやりましたが、あまり流行っていない、その辺もちゃんと見ていかないといけないと思います。

小中一貫は元々品川でやって、ある程度成果が見えたので、その成果というものを何だと考えるのか、それで今どうなのかということを考えて、どういう課題があるからどういう枠組みをしなければいけないか、という理論にしないと、なかなか折り合いがつかないというお話しも先ほどありましたが、本当に折り合いがつかないだろうと、先ほどから空中戦みたいなお話しになっていると感じています。今教育施策もＥＢＰＭという、しっかり根拠を考えて、物事をやりましょうということになっています。

もう一つ言うと、子どもが、絶対数がいないからというお話が先ほどありましたが、子どものためにというのはまず大前提ですが、もう一つはやはり行財政だとかマネジメントのことというのも一緒に考えていかないともうちょっと議論にならないかなと思います。色々と申し上げましたが、だからもう、ドラスティックな、ラジカルなことを言うと、全部義務教育学校にした方が良いのではないか、小中一貫にして９か年が良いというのであれば、無理して小学校、中学校の連続性とか考えるよりは全部を義務教育学校にしてしまった方が良いのではないか、という思いもあります。これはラジカルな話です、非現実的な話をしていますが、そういうことでも考えないと、実際に何のためにこの統廃合をやるのか、ちょっと見えてこないのではないかと思います。

（委員）

思い切った話もこれからしていかなければいけないと思います。今、副会長さんが言われたような観点からの意見もこれから出てくるでしょう。先ほど話題になった人口減少ですが、これから減る一方ですので我々は減ること自体をどうするかということを考えるのではなく、前向きに、減少する中で予想される課題をどうやって解決していくか、その一つの方法として、適正規模・適正配置ということを一つのテーマとして議論を進めておりますので、そういう現状の中でどういう方向に一歩踏み出していくかというのがこれから皆さんと一緒に議論する中で見つけていきたいと思っています。

（委員）

元々、単純に考えれば、学校が増えたのは児童数が増えたからで、ということは、児童数が減ったら学校も減る、これは、誰もが納得がいくだろうと思います。それから、この小中一貫というのは、適正とは別問題だろうと思います。伊藤先生が言われたように。９か年教育というのは、元々が、学校の管理がしやすいから初めて発想された小中一貫なんです。だから、その９か年が絶対良いのか、あるいは、今まで通り小学校６年、中学校３年、これが悪いのか、これはまた別問題なんです。先ほど言われた、最初流行ったのが東京の品川区で、どんどんやり始めたのですけれども、その成果っていうものがあるところはすごく良かったというところと、そうでもなかった、中には失敗したと

いうところもあります。今、全国的に小中一貫とあちこちで言われていますが、私はそれほど効果があるのかなと疑問視しています。小中一貫は別のところでお話しをすることであって、この適正配置のところでそういう問題があったら今度は他の方法に進んでいくのではないかと思うのですが、いかがでしょうか。

（会長）

私が、ちょっと小中一貫教育の方に舵を切りすぎたので、手段の方にどんどん話が入ってしまったことはお詫びしないといけないと思います。もちろん先ほどのお話しのように、完璧ではないけれども小中一貫をすることによって、子どもたちの育ちに途切れがないように先生たちが、小学校中学校という相手方のことを意識しながら進められるようになってきていると、そういうものが更に進んでいけば、子どもたちの育ちというものを、小中間で分断することなく進めていくことができ、子どもたちの確かな学びであるとか、健やかな成長であるとか、社会に参画するための力をつけていくことができるし、さらに、地域や家庭の力上手に借りながら、子どもたちの成長を保障していこうではないかというところは、皆さん同じではないかと思っています。

学校のあるべき姿というところで、事務局に、そのキーワードをここにもう少し足していただいて、集団規模のことに関しても小中一貫というキーワードに関しても、一人一人の委員の方々の意見だとは思いますが、キーワードとして学校のあるべき姿というところに、とりあえず置かせていただくということが必要なのではないかと思いますが、その辺りはいかがですか。

（会長）

今日は出すだけ出していただいて、という話ですが、それぞれの皆さんの意見は、なるほどそうだよねというお話であったと思います。それから最後に副会長さんが言われたように、子どものためなのだけど片方側では行財政からも見ていかなければいけないというのもまさしく当然のことかと思いますが、とりあえずこの学校のあるべき姿に関して、この４行で書かれたものをベースにして事務局側で今日のキーワードを張り付けていただいて、それで皆さんに、少なくとも学校のあるべき姿というところを基本的にはこれを成長させていくという考え方の方がよろしいかと思うのですが、次の時にはこのような形でまとめたものをおかせていただいて、ではそれを実現に向けてどういう取組をするのかというところを、委員の皆さんの方からお話をいただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

（委員）

皆さんが出された意見をそのまま全てというのは難しいかと思いますが、例えば今までの議論の中で出てきた、地域との関わりといったところも学校のあるべき姿の中に、やはり地域の中の一つの機能という部分もありますので、折り込みながらこの４行に少し肉付けしていただく、ということが私も必要だと思います。

（会長）

全ての意見は入れられないかもしれませんが、皆さんが言われたものを肉付けして、それを次回出していただいてそこを基にしながら実現に向けた取組を少しずつ考えていくという形にさせていただきたいのですが、いかがでしょうか。

（会長）
　集団規模に関しても、市街地と北部というキーワードが出てきましたが、市街地と北部とでは、そもそも集団規模も違うというお話しも出てきたと思いますので、集団規模についてももう少し大きくとらえて、宇部市全域での一つの集団規模ではなく、例えば市街地と北部、今日委員の皆さんから出てきたところを正していけば、例えば市街地と北部というところでの集団規模とは何なのか、ではそれを同じにすることができるのか、ということも今後考えていくという意味の中での集団規模という言葉の使い方という形で、いずれにしても集団規模というものをしっかり考えていかなければいけないということだと思います。いかがでしょうか。
（会長）
　それではここまでの部分をまとめさせていただくと、基本ベースとしてこの４行を活用すること、その上で、今日委員の方々から出していただいたそれぞれの意見を事務局と副会長さんも参画していただいて、少しこの４行に肉付けをしたものを次回の会議の時に提出してもらって、それを見ながら今度はその実現に向けた取組を考える、その時の集団規模に関しては、市街地と北部という部分であるとか、この集団規模については、まずは、例えば、市街地と北部の集団規模というものを考えながら、これを同じにした方が良いのかそれともそれぞれのところで考えた方が良いのか、ということも含めて、今後考えていくという形にさせていただければと思います。よろしいでしょうか。
（会長）
　事務局さんはそれでよろしいでしょうか。
（事務局）
　貴重なご意見ありがとうございます。次回、副会長さんと相談しながら、今日いただいたご意見をこの４行に盛り込んで、次回お示しできたらと思います。
（会長）
　ありがとうございます。
（会長）
　それでは、次に「ワークショップ（案）」について事務局から説明をお願いします。
（事務局）
　　--------「ワークショップ（案）」について説明-------

（会長）
　ただ今の説明について委員の皆様からご意見やご質問はありますか。
（委員）
　このワークショップは、私たち委員は傍聴することは可能でしょうか。
（事務局）
　可能です。任意になりますが、ご観覧できる方はご参加いただけたらと思います。
（委員）
　このワークショップで出てきた意見が将来あるべき学校の姿の方に反映されるのか、

それともこれを出した形で終わるのかどうか、教えていただけたらと思います。

（事務局）

このワークショップ開催の目的は、委員の皆様方に検討の参考にしていただくということですので、あるべき姿のところに盛り込まれるのか、これから手段とか色々考えていく手法の中に盛り込まれるのかは、どういった意見が出るかによりますが、子どもたちの率直な意見を少しでも参考にしていただければと考えています。

（委員）

小学校、中学校のグループ分けについては、これは同じ規模で、というふうにされていると思いますが、例えば同じ校区ではないですけど近いところでグループ分けをするのではなく、学校規模によるものですか。中学校も一般もそうですが、例えば一般の方の中学校でいったら例えば厚南と黒石で話をすると、その地域性等で話ができるのかなと思いました。ただ、規模で分けるということならそれでも良いのかなと思います。

（事務局）

今のところは学校の規模でグループ分けを考えていますが、地域別が良いのではないかということがあればそのように変更はできます。そういったご意見をいただけたらと思います。

（委員）

今日欠席された委員から質問事項を預かっているのですが、ワークショップのグループ分けが学校の規模ごとで振り分けされているように見えますが、その意図は何でしょうか。ワークショップで意見の偏りが生じませんか、という質問が来ているので、それに対してご回答いただければと思います。

（事務局）

先ほど来から出ておりますが、北部と市街地で違いがあるとか、地域性であるとか、規模の違いもありますが、そういうことは全く無視して同じグループにすると、その中で話がまとまらないというか、例えば、大規模校の方に小規模校の方の意見が吸収されたり、また逆もあろうかと思いますので、グループの中で話していただくのは、規模や地域性で分けさせていただいて、そして発表を聞く中でやはり皆さん方が、そういった地域ではそういう考え方もあるよね、とか、まとめの中で色々な意見や気づきがあれば良いと思い、このような分け方にさせていただいております。

（委員）

今度は私の意見ですが、中学生を対象にしていますが、これは小学生高学年でも良いのかとも思いました。これは中学生にした理由というのは何かありますか。

（事務局）

人口減少問題や、今の小中学校の現状などの話しもさせていただくのですが、そういったこともある程度理解もできて、自分たちの考えも述べることができる、そしてまた、小学生はまだ途中ですけれども、中学生は、振り返ってみて、その頃感じていたこと、中学生になって小学校時代のことを振り返って考えられる年代といいますか、そういったことも含めて、中学生ということにしています。

（委員）
　小学生対象のワークショップはできないですか。中学生のみを対象としたいのでしょうか。小学生高学年の意見というのも、その時しか出てこない意見等もありますし、これから中学校を迎えるにあたっての考えということもあるかと思って、小、中、両方の意見を聞くというのも良いのではないかと個人的には思いますが、いかがでしょうか。
（事務局）
　不可能ではないです。そういったことをぜひ、とのことであれば、また皆さん方の意見がそのようにまとまれば、設定することは可能です。
（委員）
　中学校の方も一般の方にも、流れが書いてありますが、（２）説明で③宇部市の小中学校の現状について、説明があるように書いてあります。これは、どういった資料を使われて、どのような現状の説明がなされるのでしょうか。
（事務局）
　その辺りも、逆にご意見をいただきたかったところですが、ここの審議会でお示ししたようなものを、中学生にまで示すのはどうかと思いますし、一般の方には知っていただきたいと思いますが、一般の方もそこまで出すのかというご意見もあるのか、それについても皆さん方にお尋ねしたいと思っております。
（会長）
　説明をどの程度までするかということですが、いかがでしょうか。
（会長）
　議論していく上であれば、一般の方の方々には、私たちに提示していただいたようなものをしっかり提示していただいて、そういうこともしっかりご理解いただいた上で、議論していただくというのが筋かなと思いますし、中学校の方にこのレベルまで提示する必要があるのかという話になりますので、これまでの、宇部市の小学校、中学校の数だったり、生徒数であったり、全体的な人数であったり、それがどんなふうに減っていくのかというところを丁寧に説明していく、内容をどんどん、色々な地区ごとの内容を出すわけではなくて、全体のところでどのように落ちていくのかというところを、しっかりと中学生が理解できる程度で良いのではないかと個人的には思いますが、いかがでしょうか。どこの地区がどうのこうのって、中学生にそれを言ってもその時点で頭に入るかというとなかなか難しいのではないかと思います。少なくともどれくらいのスピードで人数が減っていくというところは、中学生にとっても、非常にインパクトがあると思いますので、そういう中で自分たちが、後輩たちがどういう学びをしてくれたら良いかなと、自分たちは学んでいるけれど、学びの中で、後輩たちがこれからどういう学びをしてくれたら良いか、自分事として中学生が考えてみようというものではないかなと思いますが、いかがでしょうか。
（委員）
　小学生の意見も、聞いてみたい気もしますが、ワークショップが一つのきっかけとなって、もしかしたらある中学校区では、中学校区でこれについて考えてみようと子ども

たちが言い出すかもしれないです。そうするとそこで小学校と中学校で一緒になってこれを議論するというのが生まれるかもしれません。きっかけとして、今事務局が考えている形で代表の中学生に集まってもらって議論をしてもらうということからスタートするというのも一つの方法かと思います。それから、資料につきましても、大人と、大人の予備軍ではありますが中学生とではやはり違いをつけて、あくまでも規模や配置について検討するにあたり、というところですから、生々しいところをどこまで出せるかというのはよく考えないと、今、ちょっと、一朝一夕には決めかねると、私は考えます。

（会長）

中学生のテーマは、「こんな学校で学びたい」ですから。その時の「学びたい」に対してどういう情報まで与えればそのことに関して考えられるかということかと思います。当日仕切っていただけるのは伊藤副会長ですか。中学生の方は別ですか。

（事務局）

中学生の方も伊藤副会長にお引き受けいただけるのであれば、それに越したことはないですが、いかがでしょうか。

（副会長）

日程調整が必要になってきます。別件で、今、宇部市の地域づくりのこともやっていまして、そちらで、ある小学校で小学生のワークショップをやる計画を進めています。それはこのテーマではないので、要は、テーマを何にするかというのをもう少し明確にしてもらった方が良いのではないかと思います。「こんな学校で学びたい」と書いてありますが、「こんな学校で学びたい」ということでワークショップをするのと、学校規模を考えてもらうっていうことでワークショップをするのでは全然違ってくると思います。ワークショップの狙いを明確にしてもらった方が良いのではないかとは思います。

今回は、規模の方がメインになるのだろうと思いますが、そういう意味では、情報はそのまま差し上げても良いのではないかと思います。ただここに出てきている情報を見せても、多分一般の方も子どもたちもぴんとこないです。もっとぴんとくるような、例えば、宇部市がどんな感じで大きくなっていって、それで学校がどれだけ増えて、今それがどんなになってきているのか、そんなストーリー仕立てみたいな、そんなお話しの方が入るのではないかと思うので、統計データではなくそんな見せ方をしてもらった方が良いかなと思います。

（会長）

それらを含めて伊藤先生と打ち合わせしてもらってよろしいですか。少なくとも狙いを明確に、というところもありますが、規模感で分けて、こんな学校で学びたいという話ですから、普段子どもたちは全ての規模感の中でどういう学びをしているか、その中で更に自分たちの人数が少しずつ減っていって、あるいは今の色々なネットワーク上の色々なことを使いながらどんな学びをしたいのかというところも出てくると思うので、これは、もう少し、こんな学校で学びたいということを少し絞れば、規模感を揃えてそれぞれグループで考えていくので、それぞれの規模感のところでどういうふう

にやりたいかっていうことは出てくると思います。

（会長）

それでは、まず日程調整が必要だというところがありましたので、１０月８日と１５日の予定となっておりますが、副会長と事務局でお話をしていただいた上で、それぞれのテーマについては、もう一度事務局に預けてさせていただいきたいと思います。審議会としては市民ワークショップから市民の方々や中学生の意見を聴取しながら、今後の検討の参考とさせてもらうという形で実施していただければと思いますが、それでよろしいでしょうか。

【全委員了承】

（会長）

それでは、市民ワークショップに関してはそのようにさせていただきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。それでは、「３　その他」について、事務局からお願いします。

（事務局）

ありがとうございます。次回、第４回の審議会の開催は、１０月下旬になります。ワークショップについては、１０月８日と１５日に開催予定で考えておりまして、先ほどもお話ししましたが、ご都合のつく委員様にはぜひ見に来ていただきたいと思っております。

日程について正式に決まり次第改めて委員の皆様にはご案内させていただきたいと思っております。第４回の審議会は少し先になりますが１０月２８日（金）か、３１日（月）のいずれかの１８時３０分から開催させていただきたいと思いますが、委員の皆様、ご都合はいかがでしょうか。今この場でご都合がお分かりでしたらお聞かせいただけると助かります。１０月２８日（金）、それから１０月３１日（月）のどちらかでご都合の悪い日がありますでしょうか。

（事務局）

では、まだご都合が詳しくお分かりにならない方もおられると思いますので、ご都合の悪い日にちがある方は、８月３日（水）までに事務局へご連絡いただきますようにお願いします。また、本日調査票を提出いただくこととしていましたが、今後メール等での連絡をご活用いただける方につきましては、お手間を取らせるようになって大変恐縮ですが、よろしくお願いいたします。その他については以上です。

（会長）

ありがとうございました。次回は、アンケートの結果が事務局から提示されると聞いています。また、ワークショップもちょうど終わって意見等が出てきたところが、参考にできると思いますので、そのような意見等を踏まえながら今日の続きの議論をさせていただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

（委員）

ワークショップですが、今出た意見を基に更に少し変えられると思うので、変えた段階の内容は委員の皆さんに事前に見せていただけるのですか。これを決定としてそのままいくのですか。

（事務局）

また少し、副会長さんとも相談して整理した内容は、皆さんにお示ししたいと思います。

（会長）

これをベースにして、より良くするために、少し変えさせていただくということでよろしいですか。

（事務局）

そのとおりです。

（会長）

それでは、これは事務局と副会長で検討し、それができたらお渡しするということで、それがしていただけるのであれば、委員の皆さんもよろしいと思いますが、よろしいでしょうか。

【全委員了承】

（会長）

それでは、事務局にお返しします。ありがとうございました。

（事務局）

会長様、委員の皆様、本日は大変ありがとうございました。それでは、以上で、第３回審議会を終わります。